

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 「韓流」をめぐる女性たちの文化実践

—日本女性ファンのオーディエンス・エスノグラフィーを用いて

氏 名 金 愨智

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、トランスナショナルな文化を消費する韓流女性ファンの能動的な文化実践の諸相を明らかにする。その上で、彼女たちの文化実践が国家や民族、システム、ジェンダーなどを重視する社会構造(以下、「支配コード」)によってネガティブなイメージが付与されることを批判的に検討し、その際に生じる支配コードとのせめぎ合いを明らかにすることを目的とする。この目的を明らかにするために、文化実践が行われる彼女たちの日常生活の経験を記述・考察するオーディエンス・エスノグラフィー方法論を用いた。

序論では、「韓流」に対するネガティブなまなざしが一部のメディアにより支配化され、政治的論争と絡み合い、「嫌韓(「韓国嫌い」の略語)」という排他的ナショナリズムが高まる支配コードについて指摘した。これまで日本で行われた「韓流」のオーディエンス研究を取り上げ、中高年女性に集中していた初期韓流女性ファンの文化実践の諸相を明らかにした。同時に、今日若年層にまで消費層を広げている「韓流」が、政治的論争と絡み合い、複雑多様な様相を現している中で、「韓流」のオーディエンス研究が議論の展開も少なくまれであることを指摘した。これらを踏まえた上で、「韓流」オーディエンス研究を支配コードとの関係から再検討することと、その考察の範囲を見直す必要があることについて提示した。

第2章では、韓流女性ファンの文化実践とせめぎ合いの背景を、イギリスのカルチュラル・スタディーズの能動的オーディエンス論に照らし合わせて考察した。カルチュラル・スタディーズでは、オーディエンスを様々な社会権力の不平等な配分の中で従属性を文脈付けられた存在とみなしている。そのため、オーディエンスのポピュラー文化を通じた文化実践の諸相を、個々の社会関係が絡み合っている日常生活に注目し明らかにすることで、オーディエンスをその社会関係とせめぎ合う能動的存在として位置付けることに貢献してきた。この考察を通して本論文は、ネガティブなまなざしを受ける韓流女性ファンの能動的な文化実践と支配コードとのせめぎ合いの意味合いを、彼女たちを取り巻く社会関係の中から解釈することの重要性について確認した。

また、グローバル時代において、異文化との出会いは、国や階級、ジェンダーなどの違いに起因

する様々なレベルの抵抗や葛藤を醸し出す一方、変容と理解の過程を経て新たな可能性を生み出している。特に、本論文はジェンダー的視点から、女性たちが能動的にトランスナショナルな文化を消費し、多面的アイデンティティを形成し、エンパワーメントする過程について検討した。日本における「韓流」の消費は、「東アジア」や「韓国」という他者との衝突を引き起こし、ナショナリズムを高潮させる一方で、女性を中心に受け入れられながら様々な意味や可能性を生み出している。本論文は、政治的対立や紛争を醸し出している日韓関係、ひいては東アジア関係が緊迫状態に至っている今日、韓流女性ファンが生み出す様々な意味と可能性を、日本という地域的特色と彼女たちを取り巻く社会関係の中から考察することを提示した。

第3章では、本論文の主な方法論について論じた。日本の韓流女性ファンの文化実践とそのせめぎ合いを分析するための主な方法論としてオーディエンス・エスノグラフィーを用いる。伝統的な人類学におけるエスノグラフィーが他者の文化を理解することを目的に、対象者の日常生活に入り込み、その文脈を長時間に渡り詳細に記述することである一方で、オーディエンス・エスノグラフィーは、オーディエンスがポピュラー文化を消費する日常生活のなかの経験を限定的に記述し、考察することである。近年のエスノグラフィー方法論は、幅広い学問で用いられるようになり、様々な環境と変化に合わせ、その中で表れる新たな可能性と知見を発見することを重視する傾向にある。オーディエンス・エスノグラフィーを用いた諸研究によってオーディエンスの日常生活の実践へ関心が復権したことを示し、この方法論の有効性について述べた。本論文は、研究者との相互行為によって対象者の日常生活における日常的・経験的データが産出されるインタビュー調査を用いて分析した。インタビューは、両者が協力し、情報を生み出すダイナミックな過程であり、特定の文化実践において対象者本人が感じる情緒の変化などについても直接的な発話として再現されるため、エスノグラフィー的な記述と考察ができる。本論文では、サンプリングした韓流女性ファン12名とのインタビュー調査を通して再現される日常的・経験的データを提示し、彼女たちの社会関係のなかで「韓流」を通じた文化実践とそのせめぎ合いの諸相を明らかにする。

第4章では、韓流女性ファンが「韓流」を通していかなる文化実践を行っているのか、その特徴を明らかにした。彼女たちの文化実践過程に、共通して異文化である「韓流」を自身の日常生活に深く受け入れ、様々な意味解読と生産的实践を行いながら、快楽を得る能動性が見られた。その能動的な文化実践の特徴を次の6つに分析する。1つ目が、(1)トランスナショナルな「韓流」と自国文化の差異を楽しんでいたことである。彼女たちは常に「韓流」の差異を既存文化と比較しながら消費しており、その差異を受け入れながらトランスナショナルなポピュラー文化のファンとして変貌していた。2つ目が、(2)韓流スターの「完璧な男性性」を通して自身のセクシュアリティを満たしていたことである。彼女たちの中には、日本社会で男性のセクシーで強靱な姿が消え去り、草食男子が増えていることを批判的に見なし、韓流スターの完璧な男性性を通して自身の欲求を満たす能動的な消費傾向を示していた。3つ目が、(3)「私との関連性」を通して共感を得ていたことである。彼女たちは韓国ドラマやK-Popアイドルを自身の日常生活に深く関連付けて消費することでリアルなものとして共感し、代理的な満足を得ていた。4つ目が、(4)親しみやすい異文化に共感していたことである。彼女たちが消費する「韓流」は、東洋圏文化として、人物と人間関係、社会的背景などが日本と類似している。また、彼女たちは日本のアイドル文化と混淆したK-Popを、自身の日常生活のなかに抵抗なく受け入れていた。5つ目が、(5)インターネットを通して文化資本を習得

していたことである。海外発信文化という希少性を持つ「韓流」は、その消費において努力と高度な文化資本を必要とする。それを、彼女たちはインターネットを通して能動的に消費することで、高い水準の韓国語能力と「韓流」及び韓国関連の知識を身に付けていた。また、双方向的なインターネットを通して、ファンダム文化を創造し、ファン同士で共有するなど、様々な分野の文化資本を習得していた。6つ目が、(6)韓流女性ファンダムの主要文化の1つである「完コピ」を実践していたことである。彼女たちは自身が属した社会のあらゆる所で、ファン同士で相互作用しながら、ダンスという高度な技芸を生かした創造的ファンダム文化を生産し、それを楽しんでいた。以上の特徴を通して、韓流女性ファンの文化実践が、他者の文化を受け入れ、理解しながら多様性溢れる変化を体験し、エンパワーメントする能動的かつ創造的な行為であることを提示した。

第5章では、日韓関係、ひいては東アジアの政治的紛争により、ナショナリズムが高まる社会構造の中で、韓流女性ファンが自身を他者化させる支配コードといかなるせめぎ合いを表しているのかを分析した。第4章で明らかにした彼女たちの文化実践の価値が矮小化されることに批判的な視点を持ち、まず、韓国に対する認識と政治的論争に関する実証データの分析結果を取り上げ、支配コードを検討した。2011年後半から深化する日韓の政治的対立が、国内のナショナリズムと保守的傾向を仰いでいることを明らかにし、それが彼女たちの文化実践にも疲れや不安、歯がゆい思いなどの複雑な感情をもたらしていることを示した。その結果、彼女たちは、韓流ファンとしてのアイデンティティを表出することに一線を引く、「私事化」戦略を広げていた。彼女たちの「私事化」は、女性的親密感を共有する家族や友人などの身近な人と「韓流」を共有していくことで連帯感と所属感を高めながら「韓流」を楽しむ戦略であった。さらに、彼女たちの語りから、支配コードによって自身のファンダムに関する評価が矮小化されることを、「韓流」や自身のファンダムが持つ希少性という特徴として逆説的に強調することで乗り越えようとする意志が見られた。「韓流」を既存文化と区別し、差別化することでプライドを持つ彼女たちの文化実践を通して、韓流ファンダム文化が1つのサブカルチャーとして定着していることについて提示した。

結論では、本論文の要約の整理を行った後で、知見を述べた。本論文は、日本の韓流女性ファンのトランスナショナルな文化実践の複雑多様な様相が、彼女たちを取り巻く社会関係から生み出されていることを、先行研究を通して検討し、それが絡み合う日常生活の経験に焦点を当て、文化実践の諸相を明らかにした。また、彼女たちの能動的な文化実践が、支配コードによって他者化されることを批判的に検討し、その際に生じるせめぎ合いと「私事化」戦略を明らかにした。本論文は、オーディエンス・エスノグラフィー方法論を用いて彼女たちが、その支配コードの中でも私事化しながら自身の文化的趣向によってトランスナショナルな「韓流」を楽しみながらエンパワーメントし、ファン文化を維持して行く、能動的な文化実践過程を明らかにした。これを通して、韓流女性ファンを、トランスナショナルな異文化を受け入れ、多様性を体験する新たな文化的主体として、また、今も尚更紛争し続けている韓国及び東アジアを理解する新たな国際関係の主役として位置付けることができた。特に、本論文は、日韓関係が悪化している今日、日本の韓流女性ファンの文化実践を例として考察することで、トランスナショナルな文化交流による国際関係の関わり方を主題化させる契機となることを示唆する。